

■まもなくパレスチナは認識しうる存在すらなくされるだろう

ブランコ・マルチェティッチ

イスラエルがガザでの日常的な虐殺を継続することを許されている中、パレスチナ国家の承認を求める現在の動きを、イスラエルの支援者が本質的な措置を講じることを先延ばしにするための冷酷な手段と見做さざるを得ない。

パレスチナ国家の樹立は一大事件だ。この構想がなければ、大いに謳われている「二国家解決」はあり得ない。イスラエルとその米国ロビー団体は、この実現を強く阻止しようとしてきた。最も有名なのは、バラク・オバマ大統領に圧力をかけ、2011年の国連総会でのパレスチナ国家樹立を阻止したことだ。昨年、米国政府は再び国連総会でこの問題を採決にかける試みを単独で拒否した。つまり、世界のすべての国々の投票によってこの問題を決定するということであり、国連加盟国 193 カ国のうち 140 カ国が既にパレスチナを承認していることを考えると、パレスチナ側は容易に勝利できたはずだ。

そのため、イスラエルがガザ地区で引き起こした恐ろしい飢きんに対する世界的な怒りを受けて開始された、主に親イスラエル派の政府によるパレスチナ国家承認への最近の動きは朗報であるはずだ。フランス、カナダ、英国はいずれも、条件付きではあるものの、9月にパレスチナ国家を承認すると発表した。イスラエルとの関係正常化を現在の外交政策の柱に据えているサウジアラビアは、まさに今、そうするための動きを主導しており、アラブ連盟全体、欧州連合、その他 17 カ国がこれを支持している。議会の両党とも権力の座がパレスチナ人に対して非常に敵対的である傾向にある米国では、これまでに 12 人以上の下院民主党議員がドナルド・トランプ政権にこれに倣うよう求める書簡に署名している。

それでは、なぜパレスチナ国家樹立の推進はこれほど空虚に感じられるのだろうか？

おそらく、国家としての承認は歓迎すべき必要不可欠なものであるにもかかわらず、現時点では最も緊急な優先事項には程遠いというのが現状だろう。ガザ地区は飢饉に見舞われており、残存人口の実に 100%が食糧不安に陥り、戦前の人口のほぼ 4 分の 1 が最も深刻で壊滅的な状態に陥っている。これは、イスラエル政府が援助の流入を意図的に阻止し、ガザ地区が自給自足に活用できたはずのインフラと自然生態系をほぼ完全に破壊したためだ。ガザ地区の住民のほとんどにとって、食糧を得る唯一の手段はイスラエルからの援助物資の投下だ。これは、時

折行われる空輸物資の投下（着地した場所の人々を殺害し、負傷させる場合もある）か、地上にある数少ない援助拠点（これらは毎日残酷な射撃場と化している）からの配給に限られている。

たとえ明日ガザに援助物資や医薬品が大量に流れ込んだとしても（そんなことは起こらないだろうが）、今後数週間から数ヶ月の間に何千、もしかしたら何万人もの子どもたちが飢餓によりゆっくりと、苦痛に満ちた、恐ろしい死を迎えることになるだろう。国際難民連盟の会長が警告したのは、回復不可能な「大規模な飢餓による死亡」がやってくるということだ。

一方、イスラエルは将来のパレスチナ国家となるはずの領土を併合しようと目論んでいる。イスラエル議会はヨルダン川西岸地区の併合を圧倒的多数で承認したばかりだが、これは同地区の現状を公式化するに過ぎない。一方、イスラエルのベンヤミン・ネタニヤフ首相は既にガザ地区の制圧に着手しており、おそらくは本格的な併合を念頭に置いている。イスラエルがまだ支配していない約 4 分の 1 のガザ地区を軍事占領する計画で、ある政府高官はこれを「完全征服」と呼び、最終的には残存するパレスチナ人を複数の国に追放することになるだろう。

その間ずっと、イスラエル軍は爆撃や銃撃で毎日数十人ものパレスチナ人を虐殺し続けている。7 月 24 日から 8 月 6 日までの過去 2 週間（この戦争にとって例外的な期間ではない）では、平均して 1 日 70 人のパレスチナ人が殺害された。驚くべきことに、これらの死者の半数以上は、食糧を得るために支援拠点にいる人々、あるいはそこへ向かう途中の人々であり、1 日あたり 38 人の割合で殺害されている。イスラエルが支援物資の調達中に殺害した人々の総数は、このすべてを正当化した 10 月 7 日の当初の死者数（後に過大評価であったことが判明）を既に上回っている。

率直に言って、こうした状況に直面して、世界で最も強大な国（米国）の解決策が、丸一ヶ月後に実施されるほとんど象徴的な措置を脅かすことだったというのは、かなり不合理だと感じる。

●皮肉を言いたくなるのも無理はない

緊急性の降順で並べると、現在の優先事項は、イスラエルに国境を開かせて援助や人道支援活動家の大群を受け入れるよう強制し、ガザ全土の再占領計画を進めるのを阻止し、そこでイスラエルがやめようとしな一方的な戦争を永久に終わらせ、その後、少なくとも 3,900 万トンの残留有毒物質の残骸を除去してガザを再建するという、長期間に及ぶ途方もない費用のかかる取り組みを開始することだ。

これらはすべて、将来のパレスチナ国家が現実的に実現するための基本的な前提条件だ。そして、このリストに、イスラエル政府が過去 2 年間だけで、パレスチナ国家の実現を不可能にするために講じてきたあらゆる法的および実地的な措置の撤回も、おそらく加えるべきだろう。これには、ヨルダン川西岸からの不法入植者の大量追放と、両地域からのイスラエル軍の撤退が含まれる。

パレスチナ国家を承認するということは——トランプ政権によっていずれ拒否権が発動されることを十分に承知の上で——何の役にも立たない。援助は入ってこず、戦争は終結せず、ネタニヤフ首相によるガザ地区の恒久的な軍事占領と、そこに生き残るパレスチナ人を排除しようとする動きも阻止できない。これは確かなことだ。西側諸国の指導者によるこうした発表以来、イスラエルの行動は全く変わっていないのだ。

この措置が 9 月に提案されている事実が、全体をさらに残酷な冗談にしている。ネタニヤフとイスラエル軍は、少なくとも 1 ヶ月間、子どもを餓死させ、民間人を無差別に殺害し、パレスチナ領土を併合する時間を得ることになる。最も馬鹿げたのは、これらの 同じ 国々が 引き続き、イスラエルが戦争を継続するために不可欠な軍事援助を送り続けていることだ。

▼率直に言って、こうした状況に直面して、世界で最も強大な国の解決策が、丸一ヶ月後に実施されるほとんど象徴的な措置を脅かすことだったというのは、かなり不合理だと感じる

寛大な解釈では、パレスチナ国家の承認はイスラエルの指導部にとってあまりにも忌避すべきものとなるため、彼らはそれを阻止するために何でもするだろう。ジェノサイドの終結やパレスチナ領土の併合を含む手段も辞さないだろう。畢竟、彼らは計画を継続することで、世界全体の意見と国連に対して直接的で露骨な反抗を余儀なくされる状況に陥ることを望まないからだ。

もしこれがその考え方だとしたら、それは妄想に等しいほど世間知らずだ。

過去 2 年間だけでも、イスラエルは国連職員数百人を殺害し、国連平和維持部隊を意図的に繰り返し攻撃し、国連学校を攻撃・破壊し、国連パレスチナ難民支援機関を弱体化させる陰謀を企て、公式にテロ組織に指定し、国連を反ユダヤ主義で繰り返し非難するなど、記録的な攻撃を繰り返してきました。しかも、これはイスラエルが自国職員に対する刑事訴追を抹消するための脅迫キャンペーンの一環として、国際刑事裁判所の検察官を脅迫していなかった時のことだ。

これは、国際世論や国連の意見を気にする国のように聞こえるだろうか？

パレスチナ国家樹立に向けたこの突発的な動きは、世界の指導者たちがイスラエルによる大量虐殺を阻止するために何もしないことを続けるための、新たな独創的な手段に過ぎないのではないかと、冷笑的に疑わずにはいられない。世界中の世論はイスラエルの行動に明確に反対の方向に傾き、数十年後どころか数年後には、この状況がどれほど悪化するかという認識が高まっている。

パレスチナ国家の承認を試みたと言え、世論と後世のために大胆に親パレスチナ的な行動を取ったと主張できる一方で、それがイスラエルに対する実質的な抑制にはつながらないことを確信しているのだ。そして、そうすることで、この恐ろしい事態を終わらせるために実際に必要だが政治的に困難な措置、すなわち武器禁輸措置や経済制裁・外交制裁を取らないことになる。

厳しすぎると思うだろうか？ 今やパレスチナ国家樹立に熱心で大賛成の英国政府が、わずか1年前に投票の機会があったにもかかわらず辞退した時の発言を見てみよう。「パレスチナ国家の承認は新たなプロセスの開始時に行うべきではない」のではなく、「ガザの差し迫った危機の解決から始めなければならない」と。もちろん、現在の英国の立場は正反対だ。ガザの差し迫った危機の解決から始めるのではなく、世界はまずパレスチナ国家を承認すべきだ。1ヶ月後、投票の時期が来たら、英国が再びこの椅子取りゲームを繰り広げても全く不思議ではない。

世界の指導者たちが突如として独立したパレスチナ国家の実現を望んだのは素晴らしいことだ。しかし、イスラエルを実際に抑制しようとししない姿勢は、この議論を無意味なものにしている。彼らは、領土全体が他国に完全に帰属し、パレスチナ人が一切存在しないパレスチナ国家を承認しようとしているのだ。